

第58回徳島新聞賞

徳島の発展に貢献した個人や団体を表彰する徳島新聞賞。58回目を迎えた今年も、大賞にNPO法人TICO(吉野川市)、奨励賞に一般社団法人徳島イノベーションベース(徳島市)、特別賞に県立しらすぎ中学校(徳島市)が選ばれた。新型コロナウイルス禍の収束が見通せない中、古里に明るい希望を与えた各団体の活動内容を紹介する。

未来照らす光に

1993年、代表理事を務める吉田修医師ら国際支援活動に関心の高い医療関係者が集まり、勉強会を重ねた「徳島で国際協力を考える会」が前身。2002年に「TICO」と改め04年にはNPO法人化され、アフリカ南部ザンビアを中心に医療・保健福祉、農村開発事業などに取り組み。最近ではロシア侵攻後のウクライナへの医療支援にも尽力している。

吉田医師は予算と人員、物資をつぎ込み、特定のプロジェクトを集中的に進めるといふ、当時主流だった国際支援方法に疑問を持っていた。例えばまん延する感染症の背景には、不衛生な環境や貧困、教育の不足などさまざまな要因が絡んでいる。そうした問題を改善しつつ、住民が主体となる活動を持続していけるようにサポートすることが重要だと考えた。

TICOはこれまで、ザンビアでの保健・栄養指導、病院がない地域での診療所開設、妊産婦の支援事業、1119番制度のない同国での救急搬送整備事業などに取り組んできた。現地での人材育成に軸足を置き、終了後も、地元住民が引き継いでいる事業は多い。

近年では2017年、ザンビアで心臓外科医を育成するプロジェクトを始めた。心臓病医療が未熟な同国では心疾患での死亡が死因の1位だが、手術ができる医師は現地に

大賞

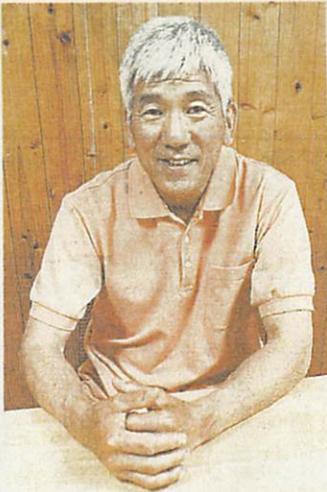
NPO法人TICO

―受賞の感想は。―

活動を広く知ってもらう良いきっかけになると思つた。またTICOの活動資金は、寄付や国際支援団体からの助成金などでまかなっている。賞金もありがたく、今後の活動に生かしたい。一長年にわたり、ザンビアを中心に国際支援活動を行っている。

地域の住民自身が、基本的な人権である健康の問題に主体的に向き合う「プライマリーヘルスケア」の考え方を中心に据えて活動してきた。TICOは地方

吉田修代表理事インタビュー



発の小さなNPOだが、大きな組織が大きなことをやってこれたのではないかと感じ、国際協力活動をやりたいという医師

も徳島に集まり、地域医療にも貢献できていると自負している。

―ロシアのウクライナ侵攻後、医療支援活動にも取り組む。隣国ハンガリーでの医療支援活動に従事した。今後、できることをやっていきたい。支援

活動に関心を寄せてくれるのはとてもありがたい。一方で、競争をしない発展途上国でも毎日、貧困や飢餓でウクライナ以上に子どもたちの命が失われている。ウクライナだけでなく、こうした現状にも目を向けてほしいと思う。

―今後の展望は。―

近年、ザンビアは度々深刻な干ばつに見舞われており、地球温暖化が加速していることを感じる。今後は医療支援とともに、現地で持続可能な農業の在り方を模索したい。水を確保して森林伐採をしなくともいい農法を確立し、干ばつに強い村づくりができるプロジェクトに取り組む。

(聞き手＝乾栄里子)

干ばつ対策にも着手

国際支援 住民主体で



にいない。先進国から派遣される医師に頼っているのが現状だが、手術を受けられるのはごく一部の人のみだ。

ザンビアを訪れて現地医師に指導しながらの手術を実施。術前後の管理を担う看護師や人工心肺装置を取り扱う臨床工学技士にも指導し「手術チーム」として育ててきつ

ある。吉田代表理事は「先進国なら助かる命が、ザンビアでは失われてきた。医師育成により年間何十人もの患者が救われる未来が見えてきた」と力を込めた。(乾栄里子)

ザンビアの心臓外科医育成プロジェクトで、手術に取り組んだ日本人とザンビア人の医師ら。死亡要因1位の心疾患を治療できるよう指導に当たっている＝5月初旬、首都ルサカ(TICO提供)